

『守護國界章』における唐沙門法寶の佛性論

——眞如所縁縁種子をめぐる論議——

久 下 陸

古鈔本『一乘佛性權實論』について

- (一) 「大開業寺沙門法寶」の撰號を有する『一乘佛性權實論』三卷は、惠谷隆戒博士が金澤文庫所藏の古鈔本中より發見されたものである。ここに掲げたのはその一部である。
- (二) 抽出の箇所は、卷中「破法爾五章第七」、「四破西方釋眞如所縁縁種子」の前半の部分である。この章には多少錯簡があるものの如く、まだ全章を明らかにするには至っていない。
- (三) 各頁の左下に數字を附して、全三卷通卷の頁數を示した。

はじめに

『一乘佛性權實論』三卷が同じ撰者による『一乘佛性究竟論』六卷と如何なる關係があるか、またこの兩著が中國と我が國を繋ぐ佛性論諍史上に如何なる地位を有するかについては、拙稿『法寶撰大般涅槃經疏における一闡提』『守護國界章』における唐沙門法寶の佛性論

新熏非法亦有如蓮花色
 隨種得度目緣種種不同皆是新意非法亦有如是
 通因點塵為却不可記具却教如大通智勝如來及
 毗舍王佛時結緣等由此之遠對其近修亦可名為
 本有種性然非法亦有云法亦有即是幸性一切衆生
 平等皆有四破西方釋真如所緣緣種子者論云
 五十二問若此習氣攝一切種子復名遍行廣重
 者出世間法從何種子生若言廣重自相種子不應

道理各出也。問法從真如所緣緣種子。豈非彼習氣
續集種子所生。西方有兩釋。一護法寺云。此是緣真
如智種子。以真如為所緣緣。故名真如所緣緣種子。二難
陀寺云。是聞熏習種子。從佛正體智為名。名真如所緣
緣種子。論云。問。若非習氣續集種子所生者。何因緣故
建立三種。答。涅槃法種子補特伽羅度。建立不取涅槃
法種子補特伽羅。所以者何。一切皆有真如所緣緣故。
在此難意。若出世間法真如。人所緣生。真如所緣緣。

一切衆生平等皆有元身。諸佛同何分。具三乘種性。
 設有元性不可說。真如所緣緣。一切皆有。種非一切。
 皆有。所以者何。不可。答。家以非一切皆有。種。答。難。家。
 將一切皆有。真如為難。又護法自云。真如所緣緣。即。
 因緣。真如智不可有智。而元具種。又喻伽自為問。答。
 不可言難。家不得答。意將真如為難。又真如所緣緣。
 曰。智論云。真如所緣緣。一切皆有。即是說智一切智。
 有因何有元不同。又准此難。意非緣。真如智及問。裏。

有種彼兩節不許此二種子一切皆有與論不同
若於通達真如所緣緣中有畢竟煩惱所知二障
種子建立為不取涅槃法種性乃至若不取者建立
如天種性准此答意許一切皆有真如所緣緣種子
故約障答已若謂真如所緣緣雖一切皆有種非一
切皆有即應約種子答又論云若於通達真如所緣
緣中准此通達是智真如所緣緣是境所緣緣中有
兩類一是真如以真如所緣緣間非真如所緣緣也

若以是真如故不得名種子何故涅槃經說第一義
 空為種子耶又善惡經瑜伽論等云種子界性名異於
 性何許是佛性不許是佛種子若以違種子六義
 判那滅等故不得名種子六義種子說具客性非本
 性言又二障能障通達真如所緣緣智同真如所緣
 緣目智種及聞熏習種俱備論云遍達十地真如即
 修惠功能深密亦說聖智通達勝義諦也故知通達
 是智真如所緣緣目境同一文說前後不合不同答

思想』に附説としてその大略を述べたのでここでは省略する。この小論においては、傳教と徳一の佛性論諍の上で眞如所縁縁種子をめぐる交された論戰に、法寶のこの著作が如何に關つてゐるかを尋ねたいと思う。またこの著者の論文を組上に載せてなされた兩者の應酬の内容を、これによつて多少なりとも明らかにしたいと思う。この主題は大陸の論諍を背負つた我が國の佛性論諍の系譜を辿る上の道標となるであらう。

この主題については既に拙稿『守護國界章と一乘佛性權實論における眞如所縁縁種子の問題』⁽²⁾がある。しかしこれは、紙數制限のため大略の要旨を述べたに止り、法寶の論文の章句を掲げて、討論對決の兩者の引證を一々原典の文脈と對照し、検討しつつ進めるべき論究が思うに委せなかつた。ここに改めて委曲を盡そうと試みた次第である。

一

『一乘佛性權實論』は「破法爾五章第七」⁽³⁾に「四破西方釋眞如所縁縁種子」の章を設け、『瑜伽師地論』卷第五十二の「眞如所縁縁種子」に對する西方兩釋、難陀と護法の解釋を示し、それを破斥する主旨の論述がなされている。これに端を發しこれをめぐつて、以後激しい論諍が繰返されることとなる。『瑜伽師地論』の當該の箇所には、
「諸出世間法從眞如所縁縁種子生」⁽⁴⁾

とあり、これは、出世間法、聖道の正因を匂わす章句である。法寶はこれを佛性論諍の中に投じ、波紋の飛礫たらしめたのである。以後これが論戰の重要な主題となり、この語を如何に解すべきかについてインドの論師の説にまで遡つて問題とされて來た。論諍は一乘家と三乘家との對決であつたがため、三乘家の典據とする『瑜伽師地論』

の中に一乗家が踏み込んで來たところに論議は決戰の様相を帶び、白熱化せざるを得なかった。

法實は五姓説を立てる唯識學派の所依とする論典中の章句を逆手に取って三乗家に突きつけ、その教學の根元ともいうべきインドの護法・難陀の二大論師の解釋にまで遡って批判し、眞如は一切皆有の種子なりという獨自の見解を披瀝した。これに對して三乗家では、眞如を所縁縁とする本有無漏種子こそ聖道の正因であり、眞如所縁縁種子とはこの謂であるとした。これが行佛性であり、正佛性であり、この有無不定によつて五姓の差別を生ずるのだという主張である。

『瑜伽師地論』の同一の文を根據としつつ、兩者の主張は眞向から對立し、對決を迫る。これが海を渡り、傳教と徳一の間に再び論戰の火蓋を切ったわけである。しかし、法實を源流とした眞如自體を種子とする主張も、またその反論も共に確たる文證に缺け、決め手がなく、應酬は千日手の様相を呈してきた。かくて遂に、惠心は『一乗要決』においてその決著を示すに至る。從來、眞如の種子性をめぐる論戰は『瑜伽師地論』卷第五十二にのみ固著していたが、惠心は同じ『瑜伽論』卷第八十によつて「眞如種性 眞如種子」⁽⁵⁾という文證を提示し、海を越えて東域の地にまで飛火し、互いに擊攘を交えた永年の論諍に終止符を打ったのである。

「況復非獨眞如生_三出世法。智觀_レ彼時生。故言_三所縁縁。言_三種子_二者。卽是眞如。或眞如體。卽名_三種子_二。」⁽⁶⁾

眞如の體そのものを出世間法の正因とし、これを種子なりとしたばかりでなく、觀智もまた出世間法の因として認め、眞如は相分となり、所縁縁たり得るとして兩者の主張を統一したのである。「所縁縁種子」の語を介して遂には直接出世間聖道の種子に眞如を歸結させた上、一方觀智もまた種子たるを否定しないところに、佛性論の歸趨に位する惠心の立場が示されたわけである。⁽⁷⁾

眞如所緣緣種子をめぐる佛性論評の系譜の極く概略は、以上の如くであり、この小論はその發端の部分に觸れるものである。

二

『守護國界章』卷下之中に「救眞如所緣緣種子章第四」⁽⁸⁾を設け、論評の内容が敘されている。ところでこの論評は初唐における法寶對慧沼の論評を背景にしており、そのため複雑微妙に入組んでいる。まず徳一は『瑜伽師地論』卷第五十二の論文を提示する。

「麤食者曰。瑜伽第五十二云復次我當略說ニ安立種子。云何略說ニ安立種子。謂於阿頼耶識中。一切諸法遍計自性妄執習氣。是名ニ安立種子。然此習氣是實物有。是世俗有。望ニ彼諸法ニ不可定説ニ異不異相。猶ニ如眞如。即此亦名ニ遍行麤重。問若此習氣。攝ニ一切種子。復名ニ遍行麤重者。諸出世間法。從ニ何種子ニ生。若言ニ麤重自性種子爲ニ種子ニ生。不應ニ道理。答諸出世間法。從ニ眞如所緣緣種子ニ生。非ニ彼習氣積集種子所ニ生。問若非ニ習氣種子所ニ生者。何因緣故。建ニ立三種般涅槃法種性補特伽羅。及建ニ立不般涅槃法種性補特伽羅。所以者何。一切皆有ニ眞如所緣緣故。答由ニ有障無障差別ニ故。若於下通ニ達眞如所緣緣ニ中。有ニ畢竟障種子ニ者。建立爲ニ不般涅槃法補特伽羅。乃至廣説」⁽⁹⁾」

ところが、徳一のこの指摘は本を正せば法寶の文に據ったものである。『一乘佛性權實論』は「瑜伽五十二云」として、この文中、「問若此習氣。攝ニ一切種子。復名ニ遍行麤重者。諸出世間法。從ニ何種子ニ生。若言ニ麤重自性種子爲ニ種子ニ生。不應ニ道理。」という問いと、「答諸出世間法。從ニ眞如所緣緣種子ニ生。非ニ彼習氣積集種子所ニ生。」

という答えを論文から引用し、次いで「西方有兩釋」として護法・難陀の説を挙げ、更に第二の問答に移っている。⁽¹⁰⁾これが法實の文の構成である。

徳一はこの法實の文を基として『瑜伽論』の本文を検し、二つの問答を一括してここに掲げたのである。以下の論述の基盤を敷くためであらう。問題の起點はこのように法實が提示した『瑜伽師地論』卷第五十二の出世間法についての二つの問答である。

その第一は、諸出世間法は如何なる種子より生ずるのかという問いに對して、それは眞如所緣緣種子より生ずるのであって、習氣積集の種子の所生ではないという答えである。麤重の煩惱、因緣によつて成立する依他起の自性を種子として生ずるとすれば道理に合わない、この點はどうか。それは眞如所緣緣種子より生ずるのであり、習氣作用の積重ねによる種子の所産ではないというのである。

その第二は、眞如所緣緣は一切に皆有するものである。ところが如何なる因緣の故に衆生に三種般涅槃法種性もしくは不般涅槃法種性の差別、つまり五姓各別ということがあるのかという問いに對して、それは有障・無障の相違による。特に不般涅槃法の補特伽羅、つまり無性有情というのは、眞如所緣緣に通過する中において畢竟して斷ずることを得ない障の種子がある場合であるとの答えである。以上が「瑜伽第五十二」の問答である。

徳一は法實の所論に對する駁論を展ずるに先だつて、法實が據つた「瑜伽第五十二」の文をまず論文からそのまま引用して掲げたわけである。その上で徳一は法實の文を引いている。

「有古人會釋此文云。此同大般若云眞如生諸法。眞如不生。西方有兩釋。一護法等云。此是緣眞如智。以眞如爲所緣緣故。名眞如所緣緣種子。二難陀等云。是聞熏習種子。從佛正體智爲名。名眞如緣緣種子。」⁽¹¹⁾

法實はここで護法と難陀の兩説を眞如所緣緣種子について要約提示し批判している。即ち護法はこれを所緣たる眞如を對境としてそれに緣する智なりとし、智種説を主張する。この説によれば眞如は當然所緣緣、智種はその種子となる。難陀はこれを聞熏習の種子とし、佛正體智即ち佛自體の根本智から流出する淨法界等流の正法を浴びて熏起する種子であるからこの稱ありとする。眞如とは佛の正體であり、所緣緣つまり眞如という外境に緣ぜられ、それに聞熏習する種子が眞如所緣緣種子であるというのである。その解釋に多少の相違はあるものの、兩者共に同一の基盤の上に立っている。それは『瑜伽師地論』の次の論文である。

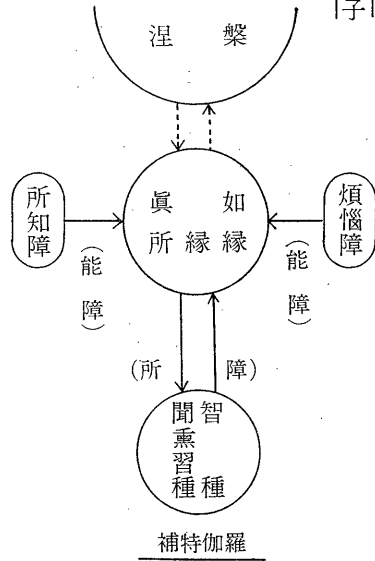
「由_レ有障無障差別_二故。若於_二通達眞如所緣緣_一中_レ有_二畢竟障種子_一者。建立爲_二不般涅槃法補特伽羅_一。」⁽¹³⁾

以上が法實の解釋である。それは『成唯識論』卷第二に據つたものと考えられるが、依據の要所は次の如くである。

「有情本來種姓差別。不_レ由_二無漏種子有_一・無_一。但依_二有障・無障_一建立。如_二瑜伽說_一。於_二眞如境_一。若有_二畢竟二障種_一者。立爲_二不般涅槃法姓_一。」(難陀新熏義)⁽¹³⁾

「無漏種微隱難_レ知。故約_二彼障_一顯_二姓差別_一。不_レ爾彼障有_二何別因_一。而有_二可_レ害・不_レ可_レ害者_一。若謂。法爾有_二此障別_一。無漏法種寧不_レ許_レ然。若本全無_二無漏法種_一。則諸聖道永_レ不得_レ生。誰當能害_二二障種子_一。而說_二依_レ障立_二三種姓別_一。既彼聖道必無_二生義_一。說_二當可_レ生亦定非_レ理_一。」(護法合生義)⁽¹⁴⁾

兩師の論旨の對立は種姓差別が本有無漏種子の有無によつて生ずるか否かに懸っている。しかし法實は兩説の論鋒の交叉には眼をくれず、兩者が共通して、實は障種に依つて種姓の別を建立しているその立論の基盤を指摘したのである。それを圖によつて略解すれば次の如くである。



注目すべきは、この兩釋共に眞如自體を種子とすることなく、眞如を所緣緣とし、種子を或は智種、或は聞熏習種として別に立てているという法實の指摘である。

三

次に『守護國界章』における徳一の文は、「論云」として再び「瑜伽第五十二」の文を引用し、先の引文中の第二の問いが繰返し掲げられている。これは一見奇妙という外はない。

「論云。問若非_ニ習氣積集之種子所_レ生者。何因緣故。建_ニ立三種般涅槃法補特伽羅。及建_ニ立不般涅槃法補特伽羅。所以者何。一切皆有_ニ眞如所緣緣_一故。準_ニ此難意。若出世間法。眞如所緣緣生者。眞如所緣緣。一切衆生等皆有無_ニ勝劣_一。何分_ニ三乘性及有無性_一。即破_ニ護法難陀等_一云。不_レ可_レ說_ニ眞如所緣緣一切皆有_一。種非_ニ一切皆有_一。」¹⁵⁾

當初の私見では、この文は法寶の論文を要約し再編した德一の文であろうと推定する外はなかった。その理由は『瑜伽論』の論文に次いで行文中に「即破護法難陀等云」の句があり、これは以下が法寶の文であることを示した德一の註記であるという推定である。それにしても、『瑜伽論』の二重の引用という謎はこの推定では解くことができなかった。

『權實論』に接するに及んで判然とした。この文はすべて前文に續く法寶の文である。文頭の「識云」の句すら原文のままである。ただ「即破護法難陀等云」のみが挿入句である。德一はこの句以外には手を加えていない。故に『瑜伽論』の文は法寶の引用である。德一は初めに「瑜伽第五十二云」として原典『瑜伽師地論』より可なり大幅に引用して掲げ、次いで「有古人會釋此文云」とこれをめぐる法寶の所論を紹介しているのである。自己の論を展開する地盤を先ず敷き、「乃至廣說」と一應引用のけじめをつけ、その上で以下法寶の論文の引用を續けたのである。『瑜伽師地論』の引文の重複という一見奇妙な構文はかくして生じた。つまり法寶が據った原典より德一が引用したものと、法寶の論文中に既に引用されていたものを法寶の文と共にそっくり德一が引出したものととの重複である。この間、德一の所見は全然介入していない。挿入は一句のみである。德一はここで護法・難陀の兩説を一括して破する法寶の言に對して何等の切返しもししていない。

さて、『瑜伽論』に説かれた第二の問いに對する法寶の釋は、「準此難意」以下に示されている。

入出世間法の生ずる眞如所緣縁は一切衆生に皆有し、補特伽羅によつて優劣はない。だとすれば、何故に三乗性或は有性・無性の差別が生ずるのか。▽

『瑜伽師地論』の本文を掲げ、かくその意を釋し、ことさらにこれを指摘した意圖は次の主張にある。

「不_レ可_レ説眞如所緣緣一切皆有。種非_二一切皆有_一。」

法實は護法と難陀の説を取り上げ、この兩釋ともに眞如所緣緣種子を解して眞如を所緣緣とし、種子を或は智種、或は聞熏習種として別立することを指摘し、この故に三乘相宗においては眞如所緣緣と種子とを分ち、眞如所緣緣は一切皆有、種は非一切皆有、前者は無勝劣であり、三乘或は有無の性を分たず、それを生ずるのは後者であるとする、この説に首肯することができない。法實の主張は眞如と種子は同體とするところにある。

ところが徳一は法實の説を次の如く解釋し紹介する。

「顯_二此破意_一。以_二種子卽眞如所緣緣_一。則眞如。是名爲_二種子_一。非_レ顯_二眞如與_二種子_一有別體_一。云何違_レ論而云_二眞如所緣緣_一。是一切有情等有。而本有無漏種子。唯有性有情有而無性有情無_レ。」

ここで初めて徳一の言が出されている。徳一は西方兩釋を破する法實の意圖をかく捉える。この文は『權實論』にはなく、法實の意を汲んだ徳一の釋に相違ない。ところで注目すべきは徳一は法實が破する兩釋の種子を、同時にまたその典據たる「瑜伽第五十二」の眞如所緣緣種子をも「本有無漏種子」と解していることである。この語は『瑜伽論』には見當らない。『成唯識論』による法相宗の通念である。しかも護法の合成義の立場に立っており、『成唯識論』の次の如き論文に據っている。

「本來自性清淨涅槃。謂一切法相眞如理。雖_レ有_二客染_一而本性淨。具_二無數量微妙功德_一。無_レ生・無_レ滅湛若_二虛空_一。一切有情平等共有。」

「眞謂眞實。顯_レ非_二虛妄_一。如謂如常。表_レ無_二變易_一。謂此眞實。於_二一切位_一常如其性。故曰_二眞如_一。卽是湛然不_二虛妄_一。」

「有無漏種。由_二轉識等數熏發_一。漸漸增勝。乃至究竟得_レ成_レ佛時。轉_二捨本來雜染識種_一。轉_二得始起清淨種識_一。任_二持一切功德種子_一。由_二本願力_一盡_二未來際_一。起_二諸妙用_一相續無_レ窮。」

眞如の「遍一切有情平等共有」は認めるが、眞如は湛然として無爲であり、發心修行の因とはならない。かくて正因として立てられたのが無漏種子であり、この種子よりすれば眞如は所縁縁たるに止る。この理念に立つて徳一は法寶の所論を「本有無漏種子の否定」の主張として捉え、それを傳教との論諍の俎上に載せたのである。

その上で法寶の文を引用する。

「次彼自釋_二成破意_一云。所以者何。不可_レ答家以_二一切有_一智種。答_中難家者將_二一切皆有_一眞如_レ爲_レ難。今推_二此釋意_一。答家者。論答_二由有障無障差別故_一是也。難家者。論云_二所以者何。一切皆有眞如所縁緣故_一是也。」⁽²⁰⁾

文中「所以者何」以下「爲難」までが法寶の言である。「今推此釋意」以下は徳一の附註である。ところがこの法寶の言は意味が通じない。強いて通ぜんとすれば、「不可答家以一切有智種」の「不可」を不適可の意とせず不能の意に取らねばならぬ。だとすれば、△眞如所縁縁は一切皆有にもかかわらず、どうして三種般涅槃法種性の補特伽羅の差別を生じ、一般涅槃法種性の補特伽羅を成立せしめるのかという問難に對して、智種は一切皆有なるが故にこれでは答えることができず、有障・無障によると答えている。その理由如何。▽となるであろう。徳一がこの意味に法寶の論旨を歪曲したと假定すれば、次の彼の言は容易に理解することができる。

「今謂不_レ爾。不_二善推_一論意。橫破_二聖人論問答意_一。」⁽²¹⁾

徳一は法寶のこの言を『瑜伽師地論』そのものに對する難詰と見ているのである。ところが、『一乘佛性權實論』を検すれば、徳一の引用には誤りがある。法寶の原文は次の如くである。

「准_二此難意_一。若出世間法眞□所緣生。眞如所緣緣一切衆生平等皆有無_二其勝劣_一。因_レ何分_二其三乘種性及有無性_一。不_レ可_レ說_二眞如所緣緣一切皆有_一。種非_二一切皆有_一。所以者何。不_レ可_下答家以_レ非_二一切皆有_レ種。答_中難家將_二一切皆有_二眞如_二爲_レ難_一。」

「以_二一切有智種_一」ではなく、「以_レ非_二一切皆有種_一」である。法寶は『瑜伽師地論』を難じたのではなく、「非_二一切皆有種_一」と答えたのだと解しては、『瑜伽論』の文を読み違ったことになると指摘したのである。「眞如所緣緣一切皆有」ならば當然、「一切皆有種」でなければならぬ。法寶が「不可」と言ったのは『瑜伽論』のこの論文自體ではなく、その解釋である。「眞如所緣緣一切衆生平等皆有」にもかかわらず、般・不般の差別が生ずるのは何故かという問いに對して、眞如所緣緣は一切皆有であるが智種は非一切皆有、有無差別があるという答えだとする解釋が「不可」だと言ったのである。

唯識相宗では、『瑜伽師地論』卷第五十二の文、

「問若非_二習氣種子所_レ生者。何因緣故。建_二立三種般涅槃法種性差別補特伽羅_一。及建_二立不般涅槃法種性補特伽羅_一。所以者何。一切皆有_二眞如所緣緣_一故。答由_二有障無障差別_一故。若於_二通_二達眞如所緣緣_一中_一。有_二畢竟障種子_一者。建立爲_二不般涅槃法種性補特伽羅_一。若不_レ爾者。建立爲_二般涅槃法種性補特伽羅_一。」（攝決擇分中五識身相應地意地之_二）

この文を取上げ、般・不般の種性差別、有無不同の因を有障・無障の差別の側から讀取つてゆくのである。『成唯識論』においてはこの次第を次の如く述べている。難陀新熏義については、

「有情本來種姓差別。不_レ由_二無漏種子有_一・無_一。但依_二有障・無障_一建立。如_二瑜伽說_一。於_二眞如境_一。若有_二畢竟二障種_一者。立爲_二不般涅槃法姓_一。若有_二畢竟所知障種_一非_二煩惱_一者。一分立爲_二聲聞種姓_一。一分立爲_二獨覺種姓_一。若無_二畢竟_一

障種^二者。卽立^レ彼爲^ニ如來種姓^一。故知本來種姓差別。依^レ障建立。非^ニ無漏種^一。⁽²⁴⁾
と述べ、護法合生義は、

「無漏性者非所斷攝。與^ニ出世法^一正爲^ニ因緣^一。此正因緣微隱難^レ了。有寄^ニ顯勝增上緣^一。方便說爲^ニ出世心種^一。依^レ障建^ニ立種姓別^一者。意顯^ニ無漏種子有[・]無^一。謂若全無^ニ無漏種^一者。彼二障種永^レ不可^レ害。卽立^レ彼爲^ニ非涅槃法^一。若唯有^ニ二乘無漏種^一者。彼所知障永^レ不可^レ害。一分立爲^ニ聲聞種姓^一。一分立爲^ニ獨覺種姓^一。若亦有^ニ佛無漏種^一者。彼二障俱俱可^ニ永害^一。卽立^レ彼爲^ニ如來種姓^一。故由^ニ無漏種子有[・]無^一。障有^ニ可斷[・]不可斷義^一。然無漏種微隱難^レ知。故約^ニ彼障^一顯^ニ姓差別^一。⁽²⁵⁾

と述べ、これを正義としている。眞如凝寂湛然の理念は、種子有爲の觀念と調和しない。故に眞如を種子とすることとはできない。出世間法の因は眞如を所緣縁とする能緣の智種である。しかし實際にはこれに對してはたらく畢竟障、煩惱・所知二障の種子の有無如何が種姓の別を生ずるとするのである。智種と障種を並べて擧げ、その相對相關のはたらきの内にこそ佛性ありとする。畢竟障種子の有無が無漏種子の有無に逆に對應する。この關係こそ、「微隱難了」というべく、かくて種姓差別が成立する。「瑜伽第五十二」を根據として無漏種子を立て般・不般の差別の法を定義づける。これが唯識法相の立場である。畢竟障の有無差別が無漏種子の有無に微妙に繋るとするところに教學傳統の解釋がある。

法實が「不可」と斷じたのはその解釋である。論文自體ではない。△一切皆有眞如所緣縁にもかかわらず、般・不般の差別が生ずるのは何故か△という問いに對して、△眞如所緣縁は一切皆有であるが、智種は非一切皆有、有無差別あるが故に△という答だとする解釋を「不可」としたのである。その理由を法實は以下に述べている。

しかし、徳一はその文を採録していない。

徳一が引用を逸した文は、『一乗佛性權實論』によれば先ず次の如くである。

「瑜伽自爲問答。不可言難家不得答意將眞如爲難。」⁽²⁶⁾

『瑜伽師地論』の論主が自問自答する以上、その間に答意が問意と食違いを生ずるはずはない。問いの主張は眞如所縁縁は一切皆有、その應答が智種は非一切皆有の故にとすれば、この問答は行違いになる。同じ論主から出た自問自答にこのようなことがあるわけがない。この問答には眞如は智種であり、一切皆有であるということが既に前提にあったはずである。その上で設けられた問いであり、答えである。これが法實の主張である。『權實論』はこう述べている。

「論云。眞如所縁縁一切皆有。卽是說智一切皆有。因何有無不同。」⁽²⁷⁾

その前提で問いが設けられた。では何によって有無不同の差別が生ずるのかというのが問意であると、法實は言う。『權實論』は語を繼いで、論文の「由有障無障差別故」を次の如く釋義する。

「又准此難意。非縁眞如智及聞熏習種。彼兩師不許此二種子一切皆有與論不同。論云。若於通達眞如所縁縁中。有畢竟煩惱所知二障種子。建立爲不般涅槃法種性。乃至若不爾者。建立如來種性。准此答意。許一切皆有眞如所縁縁種子故。約障答也。若謂眞如所縁縁雖一切皆有一種非一切皆有。卽應約種子答。」⁽²⁸⁾

この所論の要旨は次の如くである。論主の自問自答の基底にあるものは、護法の智種説或は難陀の聞熏種説とは別である。西方兩師の主張する種子は共に一切皆有ではない。論文の主旨と異なる所以である。かく兩釋を破斥し、論文の答えの部分を引き證している。眞如所縁縁種子は一切皆有である。では何故に、涅槃法の種性に差別が生じる

のか、それが問意である。これを受けて、その理由は煩惱・所知の畢竟障の種子の有無によって、般・不般、有性・無性の差別が生ずるが故にというのが答意である。この問答の脈絡は眞如所縁緣種子が一切皆有であるということとを前提として問いを投げ、それを受けて、實はと障の邊を取上げて答えたところにある。もし唯識論者の言うように眞如所縁緣は一切皆有、それを縁する種は非一切皆有だとするならば、論では當然、種子（智種）をめぐるて應答がなされるはずである。問答は能通達の種子の側から交されてしかるべきである。にも拘わらず、答えは能障の側から發せられているではないか。その理由は能通達の智は眞如所縁緣種子であり、それは一切皆有なるが故に論外の問題だからある。以上の前提に立つて、論は能障の主題に轉じたのである。以上は德一が採録しなかつた法實の所論である。

ところが德一は法實の論旨を、ただ

「今推_二此釋意_一。答家者。論答_二由有障無障差別故_一是也。難家者。論云_二所以者何_一。一切皆有眞如所縁緣故_一是也。」⁽⁹⁹⁾
と示すに止まり、右の如き法實の論の文脈、換言すれば『瑜伽論』の論文自體の論點の推移についての法實の文の委曲には何等觸れるところがない。德一の意圖は、飽くまで本有無漏種子を傳家の寶刀として振廻すにあるものらしくである。

「阿賴耶識中有漏種子。麤顯易_レ了。凡聖共許。唯無漏種。細隱難_レ知。阿賴耶識。尙凡聖不_二共許_一。況彼識中有_二本有無漏種子_一。誰得_二信解_一。故本論主。先舉_二麤顯有漏麤重_一發_レ端。緣_二往覆問答數遍徵追_一。方後顯_二本有無漏種子_一。非_レ欲_レ顯_二眞如所縁緣_一。」⁽¹⁰⁰⁾

これに對して、傳教は次の如く決擇を下している。

「若障可斷不可斷由_二智種_一者。何故。被_レ難_二智種_一。不_レ答_二有無_一。同就_二障種可斷不可斷_一答。麤食者。未_レ知_二實公智種一切有能緣所緣意_一。又不_レ會_二捨_二智種_一就_二障種_一彌勒旨_上。造_二反質難_一。實公未_レ然塞難_レ傾。麤食_二反質泉不_レ進_一。」⁸¹⁾
 右の斷案は、この論評の記錄に漏れた法實の論文を直接踏まえることによってのみ、初めて理解することができるであらう。

更に德一は、法實が眞如即智種とする主張を聖教相違の失なりとして次の如く難じている。

「瑜伽攝論云。無常法爲_二種子_一常法不_レ爲_二種子_一故。故彼論云。一刹那滅者。生已無間即滅壞爲_二種子_一。無_レ有_二常住法_一。得_レ成_二種子_一。於_二一切時_一無_二差別_一故。」⁸²⁾

常法は種子たり得ずとは『瑜伽師地論』に諸法の親因としての種子に七種の相を規定する内、その第一に數えたものである。

「又建立因有_二七種相_一。謂無常法是因。無_レ有_二常法能爲_二法因_一。」⁸³⁾

種子刹那滅とは、これを受けて『成唯識論』に種子は六種の條件を具備すべきものであるとして擧げた内の第一に、種子は刹那ごとに生滅變化あり、もしその體が常住不變ならば諸法生滅の親因たり得ずと示したものである。

「種子義略有_二六種_一。一刹那滅。謂體纔_レ生無間必滅。有_二勝功力_一方成_二種子_一。此遮_二常法_一。常無_二轉變_一不_レ可_レ說_レ有_二能生用_一故。」⁸⁴⁾

かく傳統の教義を踏まえて、ここに德一が據つたものは法實を攻撃した慧沼の論である。『能顯中邊慧日論』に眞如を種とする法實の説を四過ありとして論難した、その第二聖教相違過の條がそれである。

「若眞如爲_レ種親生_二出世間法_一。略有_二四過_一。」

「二聖教相違過。瑜伽攝論種子義中。皆云ニ一剎那滅一者。生已無間既滅壞故。無ニ有常法得レ成ニ種子。於ニ一切時ニ無ニ差別ニ故。」⁶⁵⁾

德一は慧沼の論をそのまま借用して攻撃の矢筈に番えたのである。

ところが法實は既にその應答に當るものを『權實論』の中に用意している。この一節は、この著作のすべてが現存の形で『慧日論』の前に當初から晒されていたとする見解に疑いをはさむ資を提供するもの言い得るであらう。

次の如き文である。

「若以レ違ニ種子六義剎那滅等ニ故。不レ得レ名ニ種者。六義種子說ニ其客性。非ニ本性ニ也。」⁶⁶⁾

ここに言う「客性・本性」とは、『菩薩善戒經』によれば、

「云何名レ性。性有ニ二種。一者本性。二者客性。言ニ本性ニ者。陰界六入次第相續無始無終法性自爾。是名ニ本性。言ニ客性ニ者。謂所ニ修集ニ一切善法得ニ菩薩ニ性。是名ニ客法。」⁶⁷⁾

と示され、これに據つて法實は本性をば陰界六入の有爲法に隨縁する眞如法性、つまり眞如所縁縁種子とし、これを種子六義の範疇には入れない。ところが慧沼によつて辨ぜられる法相教學は、これを陰界六入即ち本識中にある法爾本有無漏種子とし、種子一般の概念規定による六義の下に隸屬せしめるのである。つまり有爲生滅のものとせざるを得ない。かくてここに無始無終法性自爾の理念に抵觸する。

眞如と種子、無漏と種子、この相剋矛盾を如何に解決するか。これは一乘家にも三乘家にも等しく負わされた課題であつた。

傳教は冷靜にこれを捉えて次の如く警告している。これは論争の渦中にあるものの言ではない。

「寶公。如意珠種子。未_レ必具_二六義_一也。麤食者。依_二三乘權教_一。立_二有爲種子_一。寶公。據_二一乘一分_一。立_二眞如種子_一。若得_レ意相許。彼此有_レ利。若執心相諍。彼此失_レ道。⁸⁹⁾」

法寶に端を發する眞如所緣緣種子をめぐる佛性論諍の系譜は、更に元興寺沙門宗撰『一乘佛性慧日論』（別稱、一乘佛性究竟抄）等を通じ、そして更に惠心の『一乘要決』の「眞如種子」にまで至らねば完結しないであろう。この小論はその端緒に觸れたに過ぎなく、今後稿を改めて究明したいと思う。

【註記】

- (1) 佛教大學人文學論集第七號 (p. 58~60)
- (2) 印度學佛教學研究第二十一卷第一號 (p. 279~82)
- (3) 湛譽の『五教章纂釋』下卷第三には「破法爾五章」を卷中所收第五としている。(鈴木學術財團編、日本佛教全書卷三十五、p. 15, c)。「第五」は第七の誤記か。なお、原寫本には「破法爾五章」の五と章の間に「性」の書き入れがある(卷中、通卷 p. 71)。蓋し他の章目の字數に準ずれば、このまゝを是とすべきであろう。
- (4) 大正大藏經卷第二十 (p. 589, a)
- (5) 大正大藏經卷第二十 (p. 747, c)
- (6) 一乘要決卷下、惠心僧都全集第二 (p. 180)
- (7) 惠心はまた、『一乘要決』卷下の同じ「大文第七辨佛性差別」の「第三明寶公三番佛性」において、法寶の佛性論の體系を三番に組んで説き、別して理心佛性について『密嚴經』を典據として法寶が述べた論文、
「佛說如來藏以爲阿賴耶。惡慧不能知。藏即阿賴耶識。如來清淨藏。世間阿賴耶。如金與指環。展轉無差別。准此經文。雙說理心二本性。如來清淨藏是理也。世間阿賴耶是心也。如金是理也。指環是心也。」(一乘佛性權實論卷中、通卷 p. 77~8) を引證した上、眞如理性と心本性を判然と區別し、心性の清淨は別の本有無漏種子によるとする説を斥けて、煩惱と眞如は別體なしと斷じている(惠心僧都全集第二、p. 180~8)。なお、拙稿『一乘要決における法寶の佛性論』(井川定慶博士

喜壽記念會編『日本文化と淨土教論攷』所載）参照。

- (8) これは卷下之中的の本文中に附された章名であり、卷下の卷頭目次には「彈麤食者謬破眞如所緣緣種子章第四」と標記されている。

- (9) 守護國界章卷下之中、傳教大師全集第二 (p. 574)

- (10) 一乘佛性權實論卷中 (通卷 p. 99~100)

- (11) 守護國界章卷下之中、傳教大師全集第二 (p. 574~5) 本文については、「一乘要決」が「寶公云」と頭記し、「究竟論文」と末註した引文（卷下、恵心僧都全集第二、p. 172~3）と同一であるため、初め『一乘佛性究竟論』の文であろうと推定はしたがそれを確めることはできなかった。『權實論』の本文を検するに及んでここに確證を得た。ただし、「此同大般若云眞如生諸法。眞如不生。」の一文は『國界章』にはありながら『一乘要決』にも『權實論』にもない。常盤大定博士の『佛性の研究』には法寶の文として扱われている（同書、p. 515）。何によってこれを認められたか。おそらくは『能顯中邊慧日論』であろうと思う。しかし慧沼はこの文を「故知答家以眞如爲種答。難家即云不得有無不同。故知眞如能爲種生。」の後に置いており（卷第二、大正大藏經卷四十五、p. 428 c）、『國界章』には前掲の如く「西方有兩釋」の前に記されている。『究竟論』の出現を待たねばならない。なお、『一乘要決』卷下には『佛性論』卷第一の「二空所顯眞如」に據つて眞如の體は種なりと斷じた後、「眞如具諸功德」者。如_三上法爾種中引起信論。眞如生_三諸法者。如_下大般若五百六十九。云_三眞如雖_三生_三諸法。而眞如不_下生。」の挾註がある（恵心僧都全集第二、p. 178）。『究竟論』の文との何等かの關聯が豫想される。

- (12) 大正大藏經卷第三十 (p. 589, a)

- (13) 佐伯定胤校訂、新導成唯識論卷第二 (p. 67)

- (14) 新導成唯識論卷第二 (p. 72)

- (15) 守護國界章卷下之中、傳教大師全集第二 (p. 575)

- (16) 同

- (17) 新導成唯識論卷第十 (p. 447~8)

- (18) 同 卷第九 (p. 393)

- (19) 同 卷第八 (p. 367)

『守護國界章』における唐沙門法寶の佛性論

- 20 守護國界章卷下之中、傳教大師全集第二 (p. 575~6)
 21 同 (p. 576)
 22 一乘佛性權實論卷中 (通卷 p. 100~1) 私訓。以下同じ。
 23 大正大藏經卷第三十 (p. 589, a)
 24 新導成唯識論卷第二 (p. 67~8)
 25 同 (p. 71~2)
 26 一乘佛性權實論卷中 (通卷 p. 101)
 27 同
 28 同 (通卷 p. 101~2)
 29 本論註 20 参照。
 30 守護國界章卷下之中、傳教大師全集第二 (p. 576)
 31 同
 32 同 (p. 579)
 33 瑜伽師地論卷第五、大正大藏經卷第三十 (p. 302, b)
 34 新導成唯識論卷第二 (p. 73)
 35 能見中邊慧日論卷第二、引鑒除謬章第二、真如爲種謬五、大正大藏經卷第四十五 (p. 429, b)
 36 一乘佛性權實論卷中 (通卷 p. 103)
 37 菩薩善戒經卷第一、大正大藏經卷第三十 (p. 962, c)
 38 守護國界章卷下之中、傳教大師全集第二 (p. 580)